

日 高 真 実 伝 (二)

—— (東京) 帝国大学最初の教育学教授 ——

The Biography of Mazane Hidaka

平 田 宗 史

(Munefumi Hirata)

第四部 教科

(1999年7月14日受理)

第3章 一家の上京と真実

第1節 近代日本の発足と教育

日高真実は、1864年生まれなので、明治と改元される1868年には、満4歳である。そして、1874(明治7)年には、父誠実の後を追って、一家が上京する。その後、彼は、同人社⇒東京英語学校⇒東京大学予備門⇒東京大学⇒帝国大学で学ぶことになる。

彼は、正に、日本の大変革の時に生まれ、育ち、一人前となって行く。明治となって、その体制が整って来る明治20年頃までの動きを見てみよう。

1868(明治元)年

9年3日 江戸を東京と改称。

10月23日 明治と改元、一世一元制を制定。

1869(明治2)年

5月9日 東京奠都。

7月25日 版籍奉還。

1870(明治3)年

3月 大学規則及び中小学規則を制定。

10月13日 政府、平民に苗字使用を許可。

10月26日 兵制統一を布告。陸軍は仏式、海軍は英式を採用。

1871(明治4)年

8月29日 廃藩置県の詔書を下す。

9月2日 大学を廃止し、文部省を創設。

10月7日 華族・士族・平民相互の結婚を許可。

10月12日 穢多・非人の称を廃し、民籍に編入。

10月31日 文部省に編輯寮を設置し、欧米の書物の翻訳、教科書の編纂に着手。

1872(明治5)年

2月12日 学制の大綱を太政官に提出。

7月4日 東京に官立師範学校を設立。

9月4日 学制の基本理念となる「被仰出書」を布告。

9月5日 日本の最初の近代教育法である

「学制」を布告。

10月14日 新橋・横浜間に鉄道開通。

11月4日 官営模範工場富岡製糸場、操業を開始。

12月9日 太陽暦を採用。

1873(明治6)年

1月10日 徴兵令を布告。

7月28日 地租改正条例を布告。

8月 明六社設立。

10月24日 征韓論敗れ、西郷隆盛、参議を辞職。

1874(明治7)年

2月1日 佐賀の乱起こる。

3月13日 官立東京女子師範学校を設立。

12月27日 東京英語学校を設立。

1875(明治8)年

7月18日 東京開成学校より選抜の第1回海外留学生14名渡米。

1876(明治9)年

3月15日 楽善会訓盲院の設立許可。

3月28日 廃刀令を制定。

1877(明治10)年

2月15日 西南の役起こる。(9月24日 西郷隆盛自刃し降伏)

4月12日 東京大学創立。東京英語学校、東京大学予備門の一部となる。

1878(明治11)年

5月14日 文部省、日本教育令案を上奏。

1879(明治12)年

8月 教学聖旨の提示。

9月29日 教育令の公布。

1880(明治13)年

4月15日 集会条例を制定。

12月28日 改正教育令の公布。

1881(明治14)年

5月4日 小学校教則綱領の制定。

8月1日 開拓使官有物払下げらる。

8月19日 師範学校教則大綱の制定。

1882(明治15)年

6月3日 集会条例を改正し、取り締り強化。

- 10月21日 早稲田大学の前身の東京専門学校設置。
- 1883（明治16）年
- 4月16日 新聞紙条例を改正し、取り締り強化。
- 6月29日 出版条例を改正し、罰則を強化。
- 11月28日 鹿鳴館開館。
- 1884（明治17）年
- 5月7日 森有礼、文部省御用掛兼勤し、文部行政に参画。
- 1885（明治18）年
- 7月 森有礼、「教育令ニ付意見」を提出し、学校別の条例づくりを提唱。
- 8月12日 再改正教育令の公布。
- 12月22日 太政官制度を廃止し、内閣制度を創設、そして、第一次伊藤博文内閣誕生。森有礼、その初代文部大臣となる。
- 1886（明治19）年
- 3月2日 帝国大学令の公布。
- 4月10日 師範学校令・小学校令・中学校令・諸学校通則等の公布。
- 11月15日 万国赤十字条約加盟。
- 1887（明治20）年
- 4月20日 首相官邸で大仮装舞踏会を開催、その非難たかまる。
- 5月21日 学位令公布。
- 6月1日 伊藤博文首相等、憲法草案の検討開始。
- 1888（明治21）年
- 6月1日 東京天文台設置。
- 11月30日 メキシコとの通商条約（外国との最初の対等条約）に調印。
- 1889（明治22）年
- 2月11日 大日本帝国憲法・皇室典範を發布。その式典に参加しようとした文部大臣森有礼、刺客に襲われ、翌日亡くなる。
- 4月1日 市制・町村制施行開始。
- 1890（明治23）年
- 2月26日 地方長官会議「德育涵養ノ儀ニ付建議」を提出。
- 10月7日 小学校令改正公布。
- 10月30日 教育勅語發布。

以上は、日高真実の少年期から青年期までの日本の主な事項を列挙してみたのであるが、この時期は、正に、激動の時代であった。明治政府は、欧米先進諸国に追いつくため、富国強兵政策をスローガンとして掲げ、いろいろな施策を実施した。富国のために模範工場をつくったり、強兵のために徴兵令を制定した。そして、そのためには、なによりも、国民教育の普及が重要であると、考えていた。1871（明治4）年9月に文部省が設置され、欧米先進諸国の教育制度の調査に乗り出し、

翌年9月に、我が国最初の近代教育法である学制が公布された。すなわち、9月4日に、学制の基本理念となる「被仰出書」が、その翌日に、学制の本文が出された。

被仰出書の内容には、四つの特徴がある。

一つは、四民平等の教育を謳っていることである。江戸時代には、身分制が厳しく、通う学校も、教えられる内容も、身分によって、異なっていた。それに対し、身分に関係なく、同じ学校に通い、同じ内容を習うことを原則としたのである。

二つは、男女同じく教育を受けるという国民皆学を原則としたことである。

三つは、実学主義、すなわち、実際に役立つものを教えることを原則としたことである。

四つは、立身出世主義を原則としたことである。

以上のような教育理念の下に、定められた学制の本文の特徴は、次の通りである。

一つは、全国を八大学区に分け、一大学区を32の中学区、一中学区を210の小学区に分け、それぞれの学区に、大学、中学、小学を設置しようとするものである。すなわち、全国に、8つの大学、256の中学、53,760の小学を設置しようとした。そして、学区制は、学校設立の単位であると同時に、教育行政の単位でもあった。

二つは、図（Ⅲ－①）を見れば分かるように、学校体系は、基本的に、小学⇒中学⇒大学の三段階となっていることである。東洋では、二段階の分け方であったのが、西洋の学校体系の分け方の三段階の分け方を採用していることである。

三つは、小学校においても、受益者負担で授業料を徴収していることである。

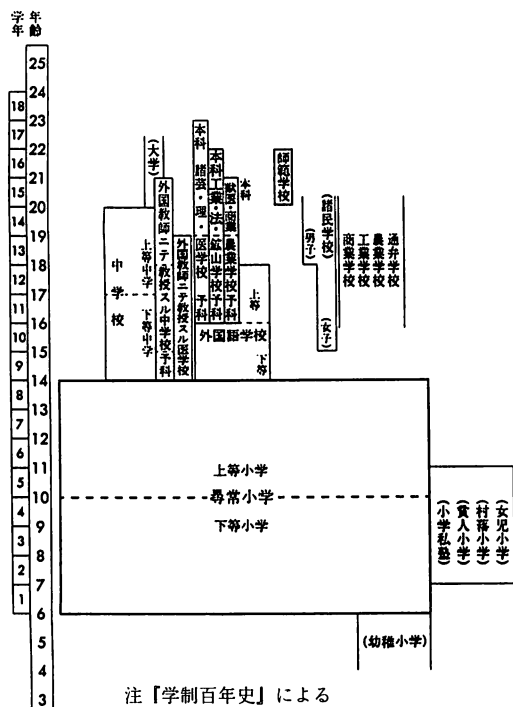
四つは、海外留学を重視したことである。すなわち、優秀な若者を欧米先進諸国に派遣し、進んだ文化を摂取させようとしたことである。日高真実のドイツ留学のルーツは、ここにある。

以上のような特徴をもつ学制は、教育行政の面では、フランス、オランダ、教育内容の面では、アメリカ、イギリス、全般的にみると、ドイツの影響も見られると言われている。

明治政府は、欧米先進諸国の教育制度を参考にして作成された学制を即座に実施できるとは考えていなかった。したがって、実施の順序を九項目にわたって考えていたのである。その第一は、小学校の設置であり、第二は、師範学校の設立であり、第三は、女子教育の普及等々であった。学制が公布された翌年の四月頃からは、小学校が、全国的に、設置され始めた。つづいて、その教員を養成する機関も設立されたのである。しかし、学制

を実施してみると、いろいろな問題が生じ、スムーズには進行しなかった。それどころか、学制実施に対して不満が生じ、暴動の一因ともなった。その理由は、基本的に、二つある。

図Ⅲ-① 学校系統図（明治6年）



一つは、教科書にしても、教育内容にしても、欧米先進諸国のそれを翻訳したものなので、日本の実情に合致しなかったことである。

二つは、学校設立にしても、学校維持にしても、国民の経済的負担が大きかったことである。

以上の理由等から、学制改革の動きが、文部省内にも出てくる。当時、文部省で実権をもっていた田中不二麻呂は、アメリカの教育を調査するために渡米した。1877（明治10）年1月、田中は帰国すると、西南戦争という国家的危機の中でも、学制改革に真剣に取り組んだのである。その結果が、1879（明治12）年9月29日公布された教育令である。教育令は、僅か47条である。学制の213章と比べると、それは、極めて、簡略であるばかりでなく、その内容は、アメリカの教育の影響を受け、地方に教育の権限を委ねるものであった。すなわち、学制の特徴の一つである学区制を廃止し、町村を小学校設立の単位とし、その小学校も、私立小学校があれば公立小学校を設立しなくても

よいとしたこと、学校事務を管理する学務委員を町村人民の選挙としたこと、等々である。教育令は、学制の制度的改革を狙ったものであるが、一方、教育理念の面から学制を改革しようとする動きが出て来る。それは、文部省側からでなく、明治天皇等の側からである。それが、教育令公布直前の8月頃作成されたという「教学聖旨」である。その内容は、教学大旨と小学条目二件の二つからなる。前者は、仁義忠孝、君臣父子の大義を教育の根本とすべきであると主張している。後者は、人間の一生で基礎となる小学校教育において重要な点を二つ指摘している。すなわち、一つは、仁義忠孝の思想を幼少の頃から徹底的に教えることであり、二つは、当時の教育は、高尚で実際生活と遊離しているの、国民の大部分を占めている農商の子弟に適した実際生活に即した教育を実施すべきだと主張している。このような儒教主義的な教育観は、その後、教育勅語に受け継がれ、戦前の教育理念として主流となっていく。

教育令は、教育の着実な土着化を狙ったものであったと言われているが、実施してみると、それは、自由放任主義と解され、学制時代着実に上昇していた小学校の設立数および就学率が減退した。予想されたこととは言え、これが、1880（明治13）年2月5日から開催された地方官会議においても問題となり、教育令改正の建白書までも提出された。地方官会議が閉会となった翌日の2月28日、文部卿寺島宗則に代わって河野敏謙が文部卿に就任した。そして、永年、文部行政の首脳であった田中不二麻呂も、文部省を去った。政府は、文部省の人事の一新を図った。それと同時に、文部省は、教育令の改正へと、歩を進めて行った。

教育令改正は、1880（明治13）年12月28日、公布された。それは、教育令の条文を修正し、三カ条を加えて五十条となるが、六カ条を削除したので、有効な条文は、四十四カ条である。教育令改正は、形式的には、教育令の改正であるけれども、教育令の内容を一変するものであった。一言で言えば、教育令は、教育の権限を地方に大幅に委ねてたのに、教育令改正は、教育に対する国の権限を強化するものとなった。具体的に言うと、教育令と比較して、教育令改正の異なる主な点は、つぎの通りである。

一つは、重要な事項については、文部行政の最高責任者である文部卿の認可を必要とするとしたこと。

二つは、府知事・県令の教育に対する権限を強化したこと。

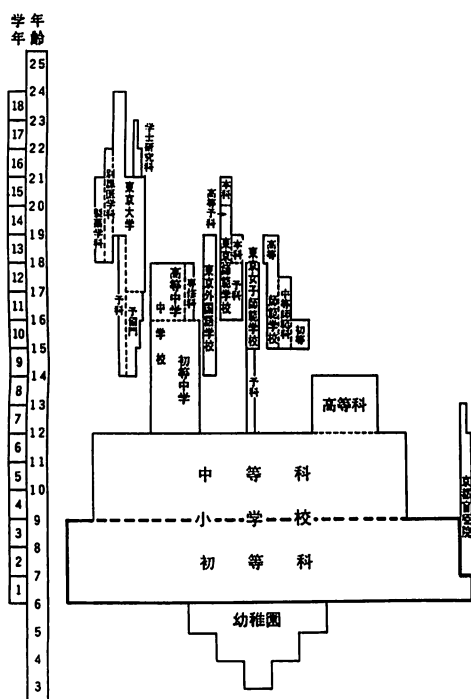
三つは、就学義務の強化を図ったこと。

四つは、教育令で教科の末尾に置かれていた修身が教科の筆頭に置かれたこと。そして、修身教科書は、儒教主義思想に基づいて作成されるようになったことである。まさに、教学聖旨の精神が生かされるようになった。

教育令改正直後から、地方の教育の諸規則は、整備されてくる。それは、文部卿の権限が強化されてきたからであろう。

しかし、主に経済的な理由から、教育の普及は、遅々として進まなかった。

図Ⅲ-② 学校系統図（明治14年）



注『学制百年史』による

その後、日本の教育が一段と進んだのは、森有礼が文部大臣に就任してからである。森は、1885（明治18）年12月22日、太政官制から内閣制に代わり、文部省の最高責任者の名称が文部卿から文部大臣に改められた最初の文部大臣である。1871（明治4）年9月2日、文部省が設置される。それから約10日遅れて、大木喬任が初代文部卿に任命される。それ以来、文部省の最高責任者である文部卿及び文部大臣は、今日まで、120名を超している。その中で最も有名なのが、森有礼である。森は若いときから教育に関心を持ち、欧米先進諸国の教育を研究していた。伊藤は、森の教育的識

見を買い、文部大臣に任命したのであった。

森は、文部大臣に就任すると、積極的に、しかも、精力的に、教育改革に乗り出した。その教育改革における彼の根本的な教育思想は、国家富強主義的教育政策であった。すなわち、明治維新政府のスローガンであった富国強兵を達成するためには、教育は、どうあるべきかを考えたのである。

まず、彼は、学校制度の整備を図った。学制、教育令、教育令改正等と異なり、学校種別に、法令を整備した。文部大臣就任の翌年3月2日、帝国大学令、4月10日、師範学校令、小学校令、中学校令、諸学校通則等を公布した。

何れの学校も重視したのは言うまでもないが、その中でも、彼は師範学校を重視したのであった。彼は、つぎのように語っている。

「苟モ日本男児タランモノハ我日本国カ是迄三等ノ地位ニ在レハ二等ニ進メ二等ニ在レハ一等ノ地位ニ進メ遂ニ万国ニ冠タランコトヲ勉メサルヘカラス然レトモ之ヲ為ス固ヨリ容易ノ事ニアラス唯待ム所普通教育ノ本源タル師範学校ニ於テ能ク其職ヲ尽スニ在リ……此外ニモ国運ヲ進ムルノ方法許多ナルベシト雖モ 十中八九ハ此師範学校ノカニ依ラスンハアラス」⁽¹⁾

また、彼は、つぎのようにも言っている。

「師範学校ニシテ其生徒ヲ教養シ完全ナル結果ヲ得ハ普通教育ノ事業ハ既ニ十分ノ九ヲ了シタリト云フヘキナリ否之ヲ十分成シ得タリト云フモ可ナラン。」⁽²⁾

森は、富国強兵の基礎となる普通教育の普及には、師範教育の充実が重要だと考えていたのである。したがって、師範学校は、軍隊式教育を取り入れ、学生を全寮制、全額給費生にし、そして、徴兵免役等の特典を与えたのである。師範学校を重視したのは、日高真実も同じであった。

森は、三期続けて文部大臣を務めたが、1889（明治22）年2月11日、大日本帝国憲法発布の記念式典に参列するため官邸を出ようとしたとき、刺客に刺され、翌日、亡くなった。しかし、彼の教育路線は受け継がれる。そして、翌年、小学校令改正、教育勅語が発布されることによって、日本の近代教育の基礎が確立される。

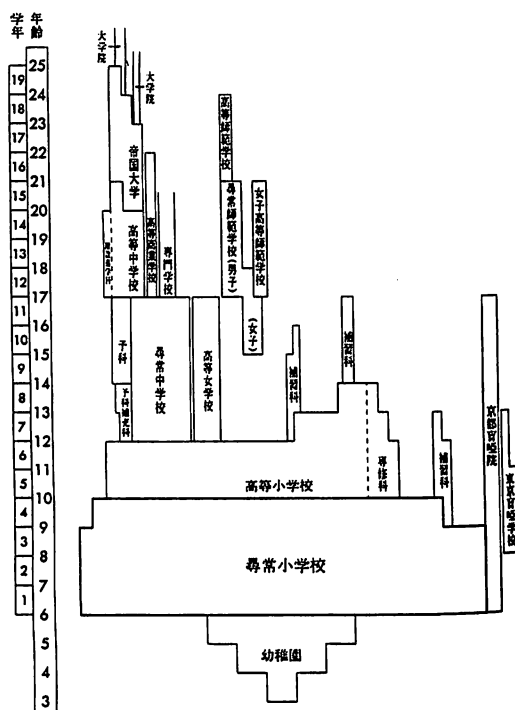
注

(1) 日下部三之介編『文部大臣森子爵之教育意見』「埼玉県尋常師範学校ニ於テノ演説」

明治21年3月10日 13頁。

(2) 同上書 2頁。

図Ⅲ-③ 学校系統図（明治25年）



注『学制百年史』による

第2節 一家の上京

真実の父・日高誠実の伝記『如淵日高誠実先生伝』によって、上京後の誠実の経歴を見てみよう⁽¹⁾。

- 1872（明治5）年
4月10日 陸軍省九等出仕を命ぜられる。
- 1873（明治6）年
4月3日 陸軍大尉に任ぜられる。第一局第五課仰付らる。
8月14日 歩兵課仰付けらる。
- 1874（明治7）年
2月26日 佐賀征討総督随行を仰付けらる。
3月8日 帰京す。
- 1875（明治8）年
11月20日 病気のため辞表を提出したが、却下さる。
12月10日 八等出仕に補され、第一局第五課出仕法則掛兼務申付けらる。
- 1877（明治10）年
9月27日 西南の役征討中の事務編纂掛兼務申付けらる。
- 1879（明治12）年
12月27日 編纂課出仕申付けらる。（参謀本部）

- 1884（明治17）年
8月30日 参謀本部出仕仰付けらる。
- 1886（明治19）年
3月3日 非職仰付けらる。
7月7日 千葉縣市原郡白鳥村西沢の仙郷に居を構える。付近の御料地原野を拝借す。梅、桃数千を移植。大和の月ヶ瀬に比し、梅ヶ瀬と命名す。
- 1887（明治20）年
牧畜、林業を経営す。
- 1888（明治21）年
私塾梅瀬書堂を建つ。学校の外別に寄宿舎を設ける。
- 1889（明治22）年
6月 非職満期により賜金三百円を受ける。
- 1915（大正4）年
8月24日 逝去。

誠実は、1868年に、高鍋藩明倫堂の教授に任ぜらる。その後、高鍋藩での彼の地位は、徐々に上がって行く。1871年1月22日（明治3年12月2日）、高鍋藩権大属に任ぜられ上京。廃藩置県後、1872年4月10日（明治5年3月3日）、陸軍省九等出仕を命ぜられる。明治政府は、軍事制度の整備・確立をも急務とした。その大きな第一歩となったのは、1869年8月15日（明治2年7月8日）に設立された兵部省であった。兵部卿を補佐した兵部大輔大村益次郎は、鋭意、兵制改革を推し進めてきたが、暗殺され、その実現を見ることが出来なかった。しかし、1872年4月4日、兵部省は、廃止され、海軍省と陸軍省が設置されたのである。日高誠実は、その頃、陸軍省の職員となったのである。翌73年には、陸軍省八等出仕を申し付けられ、陸軍大尉に任ぜられ、第一局第五課勤務となった。同年3月24日布告の陸軍省職制は、つぎの通りである⁽²⁾。

これによると、陸軍省は、大きく七局に分けられる。第一局は、通報、軍務、第二局は、歩兵、騎兵、第三局は、砲兵、第四局は、工兵、第五局は、陸軍会計事務、第六局は、陸軍文庫、第七局は、北海道兵備を司るのであった。第一局は、さらに、第一課（一般往復、軍務）、第二課（徴兵）、第三課（将官、参謀、兵学寮）、第四課（軍法、葬祭）、第五課（記室）、第六課（翻訳）に分けられ、それぞれの課長には、少佐が就任した。第一局第五課というのは、記室といわれ、その課長は、六等の官等であり、その下に十五等までの職員がいた。日高誠実は、八等出仕で、陸軍大尉であった。その課は、つぎのような事務を担当した⁽³⁾。

表Ⅲ-① 陸 軍 省 職 制 (1873年 3 月)

陸		軍										省										
陸 軍 會 議		第七局	第六局	第 五 局						第四局	第三局	第 二 局		第 一 局		陸軍御官房						
		兵 北 備 海 道	文 陸 庫 軍	陸 軍 會 計 事 務						工 兵	砲 兵	騎 兵 歩 兵		軍 通 務 報		卿	一 等					
首座 將官一人 監督長一人		此局現今未タ置カス若事相係ルアレハ第一局二風シテ処置ス	騎兵尉官一人	局長監督長一人									局長中少將一人		大輔	二 等						
少將三人 海軍少將一人				副 長 監 督 一 人						局長少尉一人	局長少尉一人	局長少尉一人		大丞	三 等							
監督一人 軍医監一人				一等副監督三人						副長大中佐一人	副長大中佐一人	副長大中佐一人		少大參佐一人	四 等							
海軍大佐一人				佐副長參謀大佐一人						副長大中佐一人	副長大中佐一人	副長大中佐一人		少大參佐一人	五 等							
		測量 影刻 地 兵 政 誌	第九課 省內經費	第八課 經費表退職料	第七課 材料清算	第六課 清算照會	第五課 調書規則	第四課 官秩對照檢閱	第三課 病院病軍	第二課 被服陣營諸員	第一課 糧食薪炭	第二課 砲兵人員	第三課 騎兵人員	第四課 輜重人員	第五課 步兵人員	第六課 翻譯	第七課 將軍警備監察	第八課 徵兵	第九課 一般往復軍務	參謀中佐一人	六 等	
		參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	參謀少佐	傳令尉官	七 等
書記 參謀大尉 一等軍吏二人		陸軍會議別二官員ヲ設クルヲ法トス然ルニ當今人員未ダ備ラサルヲ以テ姑ク二連ハ尊重トシテ省内各局ノ長官并ニ省屬諸寮官ノ長官ヲ會議シ議定ノ上朝裁ヲ請ヒ施行スル者ナリ其本法ノ如キハ逐年人材輩出ヲ待テ漸次二之ヲ設クルヲ期ス																				

(本局記録中陸軍御持參允裁ヲ諸侯義ニ付伺書ナキ旨陸軍省ヨリ申出ルト記載ス)

第五課 陸軍記室 賞牌

課長少佐一人 尉官并課僚

- 一 詔勅并ニ欽定ノ報告文ノ上簿ノ事
- 一 諸詔勅諸論旨諸法度諸條例諸決議及ヒ諸回達ノ類聚藏納ノ事
- 一 軍人軍屬外國ニテ死没ノ時其本貫ヘ届書ノ寫等收藏ノ事
- 一 陸軍日誌ノ蒐輯出版ノ事
- 一 法例ノ改正増加ハ其順次ニ從テ本書ニ挿入シ之ヲ陸軍諸官廳ヘ送達ノ事

- 一 參謀部憲兵部歩騎兵隊軍吏部ノ差遣諸役并ニ臨時派定ノ諸役ニ就テ役後其書類ノ納藏ノ事
- 一 勳級ニ叙スル詔書賞牌ノ免許追思記功泉并ニ外國ノ勳級服飾ニ係ル事務記注ノ事
- 一 退職願御免休職免職罷職兵種互換ノ將校ニ就テ奏上スル連名報告ノ記注ノ事
- 一 陸軍官員錄ノ記注出版ノ事
- 一 陸軍官員ノ多寡諸官省ニテ入用ノ時記注送達ノ事

その後、1874（明治7）年8月9日、「官房御用兼勤仰付けらる。」1875（明治8）年9月5日、「法則掛兼勤仰付けらる。」1877（明治10）年9月27日、「鹿児島暴徒征討中の事務編纂掛兼務申付けらる。」1879（明治12）年12月27日、「編纂課出仕申付けらる。」1884（明治17）年8月30日、「陸軍省御用掛仰付けらる。」そして、1886（明治19）年3月3日、彼の長男真実が、帝国大学を卒業する同月、満50歳で陸軍省を退職する。

陸軍省に在職中、日高誠実は、必ずしも、陽の当たる所を歩いたのではなかった。彼は、言うまでもなく、職業軍人ではなく、儒学を学んだ学者でしかなかった。したがって、陸軍省に在職中は、課長の下で、漢学の知識を生かして事務を執る下級役人でしかなかった。彼は、役人時代、次のようであったと言う。

「血氣盛りの三十七歳より十四年間は、陸軍に奉じられた。其の間、たゞ一回の叙位に甘んじ、同僚の榮進を嫉視するでもなく、羨望するでもなく、孜々として職務に是れ励み、唯天命に従ひ来つた。」⁽⁴⁾

職を辞すると、彼は、豹変する。千葉県令船越衛の斡旋で、千葉縣市原郡大久保村白鳥の広大な土地を得た。そこに、数千本の梅ノ木を植え、梅ヶ瀬と称した。また、開墾し、田畑とし、池を造って養魚をした。さらに、山野に牛羊を放牧し、原野を借りて植林などもした⁽⁵⁾。

産業開発を行う一方、上京する以前、高鍋藩藩校の教授であった日高誠実は、1888（明治21）年、官許を得て、私塾梅瀬書堂と八十名収容の寄宿舎を建て、青年の教育に当たったという。教科目は、国語漢文、作文、英語、数学、体育、実習であった。教師として長州出身の桂半助が国語漢文、豊後出身の入田末男が英語、数学、同族の日高亭一が体育、実習を担当したという。この塾には、君津、市原、長生、山武、夷隅の五郡の子弟が、閉塾される1901（明治34）年までに、約1000名通塾したと言われている。その中には、後年、名を成したものもいた。そして、誠実は、1915（大正4）年8月24日、満79歳で亡くなる。彼の長男真実が亡くなって21年後である⁽⁶⁾。

注

- (1) 市原蒼海著『如淵日高誠実先生伝』千葉県図書館 昭和12年6月15日 1～4頁。
- (2) 内閣記録局編『法規分類大全』兵制門 陸海軍官制 陸軍一 273～274頁。
- (3) 同上書 373頁。
- (4) 前掲書『如淵日高誠実先生伝』7頁。

(5) 同上書 9～10頁。

(6) 石川正雄『日高耳水一族』（昭和56年7月6日 講演資料）による。

第3節 同人社・東京英語学校・東京大学予備門時代の真実

誠実の母・蔦子（1851-1871）は、1871年9月12日（明治4年7月28日）、上江村高月（現在の宮崎県高鍋町）で亡くなる。真実は、才色兼備の祖母蔦子から、3～4歳の頃から詩や漢学を学んだという。その頃、彼は、既に、三字教、唐詩選等を誦したと伝えられている⁽¹⁾。

蔦子が亡くなったためか、父の上京後、3年経った1874（明治7）年、父誠実の後を追って、一家は、上京する。真実、10歳の時である。そして、早速、同人舎（社）分校に入舎したという。その月日は、分らない。そして、同人舎なるものが、何か、詳らかでない。しかし、同人舎は、多分、中村正直（1832～1891）の設立した同人社であろう。中村正直は、1832年、江戸に生まれ、昌平坂学問所で学び、幕末の1866（慶応2）年、イギリスに留学、そして、1868年に帰国。1870（明治3）年、彼の有名な『西国立志編』という翻訳書を出版した。人々は、これを争って買い、読んだ。この書は、福沢諭吉著の『西洋事情』、内田正男著の『輿地誌略』とともに、明治の3書と言われ、初版でも数十万部売れたという。彼の名は、日本全国に広まっていたのである。ある本は、つぎのように記述している。

「仮りに翻訳者の名を知らなかったとしても、恐らく明治年代の青少年の輩にして『西国立志編』を一読しない者はなかったと思ふ。仮し一読しない迄も、其の書名を聞知しなかった者は一人としてないと云ふも決して妄断ではない。爾く『西国立志編』の一卷は明治中葉の青少年を修養し、発奮せしめ青雲の志を助長したことは実に測り知る可からざる処で一とたびこれを緋けば感激紙幅の間に溢るの概があったのである。文化進み印刷出版の業の発達した今日、或は青年の修養書なるもの巷間の店頭に堆載してゐるかも知れない。然し文化の黎明（明力）期であった明治中葉には、これ程感動を与へ若人の鵬志を刺激したものは全く他になかったと云つても過言ではない。」⁽²⁾

この記述から分かるように、一万円札の肖像となった福沢諭吉と並んで、中村正直は、明治時代の若者のスターであった。真実が学んだ同人舎は、中村正直が創設した同人社であったであろう。

当時、有名な私塾は、三つあった。

「その当時に在って私塾として福沢諭吉翁の慶応義塾あり、近藤真琴翁の攻玉舎あり、偶々この両塾舎は城南の芝に設けられた関係上、敬宇先生の同人社は山の手の城北に舎屋を構えたので三者鼎立の形勢を示してゐたのである。私塾を設けて人材を養成する個性の豊かな教育方法は、教育機関の完備しない当時としては最も欠く可らざる施設であり、又、世人の要望する処でもあったから、塾舎の主となり、師範と仰が

る、人の人格、学識、思想等悉くその門を敲く子弟の知徳を養成するのは言を俟たない処である。従って先生の如き人格者を統率する同人社が、全国青年の志す標的となったこと亦当然のことであつた。」⁽³⁾

当時、慶応義塾、攻玉舎、同人社は、日本の三大私塾と言われていた。真実が上京した頃の三大私塾は、明治七年の『文部省年報』によると⁽⁴⁾、生徒数からみても、抜き出ている。

名 称	何 立	位 置	設 置	何 語	教 員	外国教員	生 徒	学 校 主
攻玉塾	私	東京新 銭座町	明治五年	英	1	英 1	男 351	近藤真琴
慶応義塾	私	東京芝 三田野	同 六年	同	13	英 1	男 526	福沢諭吉
同人社	私	東京小石川 江戸川町	同 六年	同	10	英 1 同女 1	男 235 女 18	中村正直

同人社の私学開業願が1873（明治6年）5月、東京府に提出された。

これによると、学校は、東京府管下第四十六区三小区小石川江戸川町十七番地に位置し、英学、算術、支那学を教授するのであった。その中でも、英学を主とした。そして、それらは、三級に分けられ、綴字法・単語・会語（話力）の類より地理・歴史・究理・経済・修身学等の書を訳読・輪講させた。算術は四法及び開方より代数・幾何・微分・積分に至るまで等級に応じ授業が行われた。支那学は、英学の余力をもって初学読本・皇漢・西洋翻訳書等を生徒の力に応じ授業したのである。授業時間は、午前九時から午後四時までであった。そして、入塾生は、全寮制で「夜中九時迄二各室ヲ見回り、且ツ人員ヲ改メ、不在数度ニ及ハバ退塾」させたのである。真実が入舎した明治7年は、同人社は、開業早々であり、生徒数は、慶応義塾、攻玉社に劣るとしても、活気溢れるものであった⁽⁵⁾。生徒数は、他の二塾より少ないとしても、外国人数員は、2人もおり、その内の1人は女性であり、女子生徒も、18人もいたのである。

上京した真実は、そのような塾で学んだ後、1875（明治8）年11月、東京英語学校に入り、英語学を修業することとなった。満11歳の時である。

東京英語学校は、南校⇒第一大学区第一番中学（1872年9月）⇒開成学校（1873年4月）⇒開成学校付設外国語学校（1873年8月）⇒東京外国語学校（1873年11月4日）という系譜を経て、1874（明治7）年12月22日、東京外国語学校の英語科が分離独立して、東京英語学校となる。外国語学

校は、語学の専門教育機関としての側面と上級学校への進学予備教育機関という側面の両方を有していた。英語科が東京英語学校と分離独立するころ、当時の最高学府である東京開成学校の専門学科は、英語で授業することになっていたので、東京英語学校は、その予備教育機関となっていた。

日高真実は、約1カ月後に、入学する。その当時の学校職員は、学校長1人、同心得1人、教員20人、吏員8人、医員2人、諸雇2人、計34人である。御雇外国人数員は、アメリカ人4人、イギリス人7人、計11人である。翌明治9年1月から8月までのそれは、学校長1人、同心得1人、教員内国人24人、外国人（イギリス人5人、アメリカ人4人）9人、吏員13人である⁽⁶⁾。

校則によると⁽⁷⁾、「当校ハ英語学ヲ志ス者ヲ教授シ上下二等ノ語学教科ヲ卒業スルヲ以テ法トスル事」を目的とするのであった。ただし、「専門学校ニ於テ生徒ヲ募ルトキ其試問ニ合格スヘキ教科ヲ踏ミタルモノハ上等語学ノ教科未タ卒業ニ至ラスト雖トモ各自ノ望ニ任セ専門学校ヘ移ラシムルコト亦アルヘキ事」と、定めている。教科は、上等語学と下等語学とに分け、それぞれの修業年限を3カ年とした。さらに、3カ年を6級に分け、「毎年半年即チ一期ノ課業トナシ一日正課ノ四時間ト定」めた。学年の始めを9月1日とし、その終わりを翌年の7月15日と定めた。また、1年を9月1日から翌年の2月14日までを第一期、2月15日から7月15日までを第二期とに分けた。入学は年2回で定期試験後を原則とし、臨時入学も認めた。入学者は、「其年齢十三年以上十七年以下

タルヘキ事」(但学業優等ノ者ハ年齢此限ニアラサル事)とし、「当分生徒六百員ヲ以テ限トスル事」と、入学者定員を600名とした。

東京英語学校が設立されると、その反響が大きくなり、入学志願者が激増して来る。東京外国語学校英語科時代の生徒は、1873(明治6)年、294人であったのが、74年、337人、東京英語学校となる翌年の75年には、629人と激増する⁽⁸⁾。これは、専門教育を行う東京開成学校が教授用語として英語を採用したことにより、東京英語学校が、その予備教育機関としての性格をもつようになったことに因るのである。

日高真実は、彼の履歴書によると、「明治八年十一月 東京英語学校ニ入り英語学修業」とあるが、彼が生まれたのは、1864年10月17日(元治元年9月17日)であるので、東京英語学校に入学したのは、満11歳と1カ月ということになる。入学年齢は、満13年以上17年以下ということなので、「学業優等ノ者ハ年齢此限ニアラサル事」という但し書きによって入学したのである。

真実の入学当初の頃の東京英語学校は、前述したように、下等語学(3年)と上等語学(3年)とからなるが、先ず、入学すると、下等語学第一年第一期第六級に入る。その教則は、つぎの通りである⁽⁹⁾。

- 「
 下等語学
 ○第一年 第一期
 第六級
 ウィルソン氏綴字書
 チャンブル氏第一読本
 連語編
 スペンセル氏第三及ヒ第四習字本
 一 語学 一週間九時
 通常物名単語連語及ヒ通常会話ヲ教フ○教師撰集シタル単語適宜ノ連語及ヒ通常ノ会話ヲ以テ課トシ且更ニ単語連語ヲ設テ之ヲ授ケ且前日ノ課程ヲ復習セシム○時宜ニヨリ連語篇ヲ用ユベシ
 発音ヲ明ニシ読声ヲ正スガ為メニ毎日元音ヲ練習セシメ且人々ノ誤音ヲ正スニ合同練習ヲ設ケ且音図ヲ用ユベシ
 二 読方及ヒ綴字 一週間六時
 在期中チャンブル氏第一読本ヲ卒ラシムコト発音ヲ正シ及ヒ辞義文意ヲ誤ルコトナキ様注意スベシ又発音ヲ正スカ為メニ合同読課ヲ設ク
 各読章ノ首ニ掲載セル単語其他章中ヨリ撰集セル単語ヲ口綴(口綴)セシム○綴字書中ヨリ抜粋シタル綴字課ヲ誦セシム
 三 算術 一週間三時

実物ヲ数ヘシメ以テ計数ノ考ヲ發起セシメ数字ヲ誦シ且之ヲ書記シ加減乗及單易ノ除法中ニ就テ簡易ノ問題ヲ解答セシメ且加減乗ノ表ヲ誦セシム○加 倍 数 ヲ口誦シ例ヘハ一三五七九等毎ニ二ヲ加倍スルノ数ナリ此等ヲ速ニ誦セシムルヲ云フ或ハ簡易ノ問題許多ヲ誦セシメ以テ暗算ニ熟達セシム○各生徒ニ石盤筆ヲ付与ス教授ハ全ク口授ヲ以テス

- 四 習字 一週間六時
 在期中第三第四習字本ヲ卒ラシム○筆ノ持方及ヒ体ノ位置ヲ守ラシメ習字本ヲ清潔ニ保タシム
 五 唱歌
 六 体操

○第一年 第二期 第五級

教科書
 ウィルソン氏綴字書
 チャンブル氏第二読本
 連語編
 スペンセル氏第五第六習字本
 音図

- 一 語学 一週間九時
 練習第一期ノ如シ此練習ノ目的ハ生徒ヲシテ広ク語ニ通セシメ以テ正キ文章ヲ作ルヲ得セシムルニアリ○発音及ヒ読声ニ注意スルコト前期ノ如シ
 二 読方及ヒ綴字 一週間六時
 在期中チャンブル氏第二読本ヲ卒ラシム○練習第一期ノ如シ各読章ノ首ニ掲載セル単語及ヒ章中ヨリ抜抄セル単語ヲ口綴セシメ且綴字書中ヨリ抜粋シテ毎日綴字科ヲ付与ス
 三 算術 一週間三時
 加減乗除ノ四大則ノ使用及ヒ分数小数ヲ教授シ石盤塗板上ノ練習ヲ設ク○此等ノ課目中暗算アルヘシ
 四 習字 一週間六時
 在期中第五第六習字本ヲ用ユ○筆勢縦横自由ナラシム様注意セシメ且首ノ字ノ用方ヲ教フ
 五 唱歌
 六 体操

○第二年 第一期 第四級

教科書
 チャンブル氏第三読本
 連語編
 ロビンソン氏実地算術書
 スペンセル氏第七及ヒ第八習字本
 地球儀
 地図

- 一 語学 一週間六時
 単語及ヒ通常会話ヲ練習スルコト前期ノ如シ○教師稗史及ヒ短キ小説ヲ講シ生徒ヲシテ復タ之ヲ口演セシメ且短易ノ会話文ヲ授ケテ之ヲ復書セシム
 形、大サ、色、草木及ヒ動物ノ事ヲ口授ス○此等ノ口授ハ生徒ノ能力ヲ養成シ且之ヲ了解シテ活用セシムルヲ要旨トス
- 二 読方及ヒ書取 一週間六時
 在期中チャンブル氏第三読本ヲ卒ラシム○読声滑カニシテ且明瞭ナラシムル様注意セシメ且句点首字ノ用方ニ注意セシムヘシ○読本中ノ一部ヲ綴字セシム
 読章ノ尾ニ記載セル文章及ヒ教師ノ抜抄セル文章ヲ読ミ生徒ヲシテ石盤上ニ書取ラシメ其誤脱及ヒ首字等ノ誤用ヲ点検ス○一週間一回手冊上ニ書取ラシメ以テ後日在期中ノ進歩ヲ示スニ供ス
- 三 文法 一週間三時
 語類ヲ區別シ且学力ニ依テ初メハ簡易ノ文章ヲ作り終ニ高尚ノ文章ヲ作ルノ方ヲ口授ス○文法上ノ謬誤ヲ正スコトヲ練習セシム
- 四 算術 一週間三時
 名数ヲ教フヘシ但シ外国ノ度量權衡ニシテ甚タ要用ナラサルモノハ之ヲ除ク而シテ其他「メトリック、システム」^{寸、尺、丈等ヲ以テ度ルノ法式ヲムフ}及ヒ日本度量權衡及ヒ貨幣ヲ教フヘシ○此課程中前期ノ如ク暗算アルヘシ
- 五 地理 一週間三時
 地球儀及ヒ地図ヲ以テ地球ノ形状水陸ノ分脈並ニ地球ノ自轉地軸兩極五帶及ヒ緊要ノ周圍線ヲ講明スヘシ
 日本島及ヒ近隣諸国ヲ図題トシテ地図製作ノ大意ヲ教フヘシ○初メ原図ヨリ写サシメ後ニ自己ノ記憶ニ因テ之ヲ製出セシム○成図ハ総て級中ノ生徒同紙ヲ用キ図中ニ其記憶スル所ノ名山大川等ヲ画カシム○此成図ハ之ヲ藏ヲ以テ後日生徒ノ進歩ヲ示スニ供ス
- 六 習字 一週間三時
 在期中第七及ヒ第八習字本ヲ用ユ○善キ書体ヲ得セシムル様注意スヘシ
- 七 唱歌
- 八 体操

○第二年 第二期

第三級

教科書

チャンブル氏第四読本

連語編

ロビンソン氏実地算術書

モーリー氏地理書

地図

一 語学 一週間六時

単語及ヒ通常会話ノ練習アルヘシ稗史小説

ヲ誦讀セシム艸木、動物ノ名及ヒ其体部性質利用等ヲ口授ス

此口授課ニ基キテ席上作文ヲ設ク○一週間一回題ヲ設テ作文セシメ之ヲ作文集ノ内ニ写シテ生徒ノ進歩ヲ示スニ供ス

二 読方及ヒ書取 一週間六時

在期中チャンブル氏第四読本ヲ卒ラシム○綴字及ヒ書取前期ノ如シ

三 文法 一週間三時

名詞、形容詞、動詞、及副詞ノ変^(ママ)モデフィケーション^{モデフィケーション}体ヲ口授シ且作文ノ法ヲ教フ而人文法上ノ誤チ正スコトヲ習ハシム

四 算術 一週間三時

抽^{トク}分^{ベツ}及ヒ其使用○率及比例

暗算

五 地理 一週間三時

口授及ヒ教科書ヲ以テ教授ス○地球各大洲中名山、大川、都府等地形ノ大略ヲ教フ
 地図製作前期ノ如ク生徒記憶ニ依テ各大洲ノ成図ヲ作ラシメ且之ヲ藏シテ以テ其進歩ヲ示スニ供ス

六 習字 一週間三時

善キ書体ヲ存シ及ヒ書方迅速ナランヲ要旨トス

七 唱歌

八 体操

○第三年 第一期

第二級

教科書

ブラオン氏文法書

ロビンソン氏実地算術書

モーリー氏地理書

ウーストル氏歴史

一 語学 一週間六時

単語及ヒ連語ヲ練習スルコト前期ノ如シ又精選ノ文章ヲ誦讀セシム製造品ノ商業ヲヨビ其製造ノ方法ヲ口授ス
 席上作文前期ノ如シ毎週ノ作文ハ作文集ニ写シ置クヘシ

二 読方及ヒ書取 一週間三時

読本ハ教科書ノ歴史ヲ以テス○教師翌日ノ読課ヲ預メ講読ス且課程中其一部ヲ綴字セシムヘシ○書取前期ノ如シ

三 文法 一週間三時

教科書ヲ用キ次序ヲ追テ之ヲ教授シ且作文及ヒ文章ノ謬誤ヲ正ス

四 算術 一週間三時

開平開立及ヒ面積測量^{メンシユレーション}ノ初歩ヲ授ケ算術緊要ノ部ヲ復習ス○暗算アルヘシ

五 地理 一週間三時

西半球諸国一般ノ地理ヲ学ハシメ各国ニ關スル細詳ノ件欸ハ之ヲ除ク地図製作前期ノ如シ而シテ経緯両度ノ用及ヒ其野画ヲ講明シ且南北亞米利加ノ地図及ヒ合衆國ノ細図

- 六 ラ作ラシム
歴史 一週間三時
在期中教科書ノ半ヲ卒ラシム○教師自ラ教科書中漏洩ノ記事等ヲ加ヘ教フ
七 習字 一週間三時
公私ノ書簡ノ体裁ヲ教ヘ之ヲ習字セシム
八 唱歌
九 体操

○第三年 第二期

第一級

教科書

ブラオン氏文法書

ロビンソン氏実地算術書

モーリー氏地理書

ウーストル氏歴史

一 語学

一週間六時

單語及ヒ連語練習前期ノ如シ○精選ノ文章
ヲ諳誦セシム

築造ニ用ユル材料緊要ノ金屬、空氣、水、呼吸等ノ事ヲ口授ス作文前期ノ如シ

—

讀方及ヒ書取 一週間三時

教科書ノ歴史ヲ用ユルコト前期ノ如シ
書取アルベシ

三 文法

一週間三時

文章ノ解剖○文法規則及ヒ其使用○作文ヲ練習シ及ヒ其謬誤ヲ正ス

四

一週間三時

緊要ノ部分ヲ復習ス

五 地理

一週間三時

東半球諸国一般ノ地理

地圖製作前期ノ如シ則チ亜米利加、謳羅巴
及ヒ亞細亞ノ地圖ヲ製シ且貌利顛島及ヒ日
本ノ細圖ヲ作ラシム

六 歷中

一週間三時

在期中教科書歴史ヲ卒ラシム○日本外国ト
ノ条約及ヒ近時条約國ト交際ノ景況ヲ口授
ス

七 習字

一週間三時

習字前期ノ如シ

八 唱歌

力 休操

**表Ⅲ—② 東京英語学校 下等語学科一週間
授業時間表**

学 科	第 一 年		第 二 年		第 三 年	
	第一期	第二期	第一期	第二期	第一期	第二期
语 学	九 时	九 时	六 时	六 时	六 时	六 时
方 言						
文字	六 时	六 时	六 时	六 时	三 时	三 时
文 法			三 时	三 时	三 时	三 时
算 術	三 时	三 时	三 时	三 时	三 时	三 时
地 理			三 时	三 时	三 时	三 时
歷 史					三 时	三 时
習 字	六 时	六 时	三 时	三 时	三 时	三 时
唱 歌						
体 操						

下等語学科の教則と一週間授業時間表から言えることは、つぎのようなことである。

一つは、先ず、東京英語学校という名の通り、語学すなわち、英語を修得させるための学科が中心となっており、一週間授業時間の半分以上が、その時間に当てられている。特に、第一年、第二年において、その傾向が強い。

二つは、そういう中で、算術が、入学当初から教えられていることである。

三つは、学年が上がるにつれて、地理、歴史の教科が、英語で書かれた教科書を使用して教えられていることである。これは、日本の若者の眼を世界へ向けさせようとしたのであろう。

日高真実が、東京英語学校に入学した1875（明治8）年12月現在の文部省への報告によると、下等語学の教員と生徒の内訳は、表（Ⅲ－③）の通りである⁴⁰⁾。

この表によると、第一級から第五級まで、教員は、すべて、御雇外国人である。第六級は、一から十一までのクラスに分かれ、その一から四までは、御雇外国人教師が、そして、五から十一までを日本人教師が教えている。御雇外国人教師の国籍を見ると、アメリカ人4名、イギリス人7名である。その月給は、250円（1人）、200円（2人）、150円（7人）、125円（1人）である。その月給は、日本人教師のそれと比べると、かなりの高給である。御雇外国人教師の中で最高の給与を貰っているのは、我が国最初の教員養成機関である官立師範学校が東京に設置された時、最初の教師と

表Ⅲ一③ 東京英語学校の教員・生徒数

(1875年12月現在)

等 級	受 付 教 員	生 員	入 学	退 学	入 舍	寄 宿	通 学	昇 級	降 級	
下 等	第 1 級	エム, エム, スコット	{	4			4			
	第 2 級			26		8	18			
	第 3 級	エフ, エム, レーシー	31	3		4	27		2	
	第 4 級	エフ, エー, マエヤ	40	2	1	7	33	2		
	同 2	ビー, ポート	38	1	1	5	33		1	
	第 5 級	エム, フエントン	34			1	6	28		
	同 同	エウチ, マツカーナル	42	3	1	4	38		3	
	同 3	エツチ, ポート	35	3	1	9	26		1	
	第 6 級	グブリ, ヴェー, オグット	45	1	1	11	34		1	
	同 同	イー, エッパ, マグエット	42		2	3	39		3	
	同 3	エス, グブリ, ストレング	32		2	5	27			
等	同 4	オーエム, レーシー	33	4		7	26			
	同 5	井 上 良 一	{	36	12	2	5	31		5
	同 6	鈴木 知 雄				4	26		9	
	同 7	鈴 木 武之助	30	2						
	同 同	佐々木 正 三	{	45	5	1	45		3	
	同 8	関 盛之進				1	3	27	1	4
	同 同	河 野 敬 作	{	30	2			24		
	同 9	鈴 木 正 三			24					
	同 同	佐々木 彦五郎	{	26			2	24		
	同 10	清水 弘 義			36	36		36		
	同 11	市 郷								
合 計	20 内 外 9 11	629	97	14	4	83	546	3	32	

なったスコットであった。彼は、教授法に優れていたという。特に、英語の指導力は、抜群であったと、卒業生達は、異口同音に言っている。

東京英語学校の教育の様子を、東京外国語学校英語科に明治7年3月に入学し、東京英語学校を卒業した宮部金吾は、学校の様子をつぎのように回想している⁽¹⁾。

「明治七年三月東京外国語外国語英語科の試験を受けて合格し、最下級なる英語学下等六級の丁組に編入された。学校は神田一ツ橋通に在って、現在の学生会館前に当り、元の商科大学敷地内に位置してゐた。この外国語学校の英語学の部門はその年の十二月に分離して東京英語学校となり、旧校舎の筋向なる榊原邸に移った。その敷地は開成学校（後の東京大学）の敷地の隣接地である。なほ余談になるが、東京英語学校は明治十年に廃せられ、大学予備門に変わった。

英語学校の教育方針は全部英語の所謂正則主義で、教師は英米人が主となり、下級には邦人が加はり、最下級は邦人のみで担当した。英語学校の学級は一級から六級にわかれ、一級から三級までは一組、四級は甲乙の二組、五級は甲乙丙の三組、六級は甲乙丙丁の四組から成ってゐた。最下級六級の丁組を振出し、各級担任教官監督指導のもとに、毎月若しくは二、三箇月毎に小試験が行はれ、その成績の優良なものは抜擢進級せしむる制度であった。

私は先に記したやうに入学当時は六級の丁組にゐたのであるが、同年五月には級のものの四、五名と共に丙組に進級、六月には乙組に、九月には甲組に、同月重ねて五級の丙組に、十一月には五級の乙組に翌八年の三月には五級の甲組に、七月には四級の乙組に、十月には四級の甲組に、更に翌九年三月には三級に、九月には二級に、十年の三月には一級に進んだ。このやうに殆ど試験の度毎に幸なる進級をつづけた。

（中略）

この頃を考へると、教育の制度が丁度一つの大きな過渡時代にあったやうに思ふ。生徒は多く東京で英語の正則教授をしてゐた神田の共立学校からか、横浜の高島学校から入って来た。一級全科目を通じ一外人が算術、読方、綴方、地理、歴史等皆英語の教科書を使用してこれを担当してゐたが、明治九年頃には漢字が課程の中に加った。また翻訳の組も

出来た。私がやったのは Murry の Physical Geography で、割合に早く二月位で卒業と認められた。この組の受持は教諭下條幸次郎氏であった。教師に就ての思出は今となつては大分散漫になってゐるが、その二、三を記してみよう。六級の頃にポート（POAT）が居た。彼は歯医者志望の英人で、米国遊学の途上を日本に立ち寄つてゐたものである。私の前歯が齲歯になってゐるのを見て直してやるから来るやうにと誘はれたまゝ、彼を訪問した所、前歯の穴にゴムを埋めてくれた。一通りの治療器具が揃つて居て、それが馬鹿に美しく清潔に見えた。五級の甲組に居た時にはマッカーサー（MACARTHUR）といふ酒飲みの英人が居た。商人あがりらしく、数学も加減乗除位しか判らなかつたらしい。彼は生徒をよく可愛がり、屢々生徒に遊びに来ないかと誘ひかけた。私は級友と共にそこに算術を教はりに行き、分数のことを聞いたたら、『分数？そんなこと判らないさ』と平然と答へた。四級の甲組に進んだ時にはマイヤー（MEYER）といふ仏人の肥つた教師が居り、彼は私の試験点等標に“A good hard working boy”『宮部君は頗る出精なり』との評を与へてくれた。四級を終つた時、彼を中心にして撮つた記念写真が今私の手許に残つてゐる。……三級の時の教師のフェントン（FENTON）は英人で昆虫学者であつた。私が札幌に來た翌年石川千代松君を助として札幌に蝶類の採集にやつて來たことがある。二級の時の教師レーシー（LECEY）は米人である。彼は金星が太陽の面を通過した時の観測班に加はつて來た低居残つて教師となつたので、数学が得意であり、また音楽に興味を持つてゐた。彼は私の点等標に“A model pupil, would make a fine teacher of Arithmetic”なる評をくれた。

一級の教師はスコット（SCOTT）と云ふ米国の教育家で、英作文を教へる事が非常に巧みであつた。この組に入ってから英作文の上達は飛躍的であつたと思はれ、それが非常に後年のためになつた。」

詳細にみると、宮部金吾の回想は、記憶違いと思われるところもあるけれども、東京英語学校の設立、教育方針、学級編成、教授方針、進級、御雇外国人教師の人格及び学識等についての様子の描写は的確である。

日高真実は、宮部金吾より遅れて、1年9カ月後の明治8年12月、東京英語学校に入学したのであるが、彼の在学時の東京英語学校の様子も、これと変わらなかったものと推察される。

明治政府は、1877（明治10）年4月5日、東京開成学校を東京大学と改称するとともに、東京英語学校を東京大学予備門と改称することを許可した。そして、文部省は、同月12日、つぎのように布達した。

「東京英語学校自今東京大学予備門ト改称東京大学ニ附属セシメ候条此旨布達候」⁴²⁾

また、同日、つぎのように、布達した。

「文部省所轄東京開成学校東京医学校ヲ合併シ東京大学ト改称候条此旨布達候事」⁴³⁾

これによって、法・理・文・医の四学部からなる東京大学が発足することとなった。東京大学予備門が、旧東京開成学校と旧東京英語学校から完全に脱皮するのは、それが発足して1年2カ月後に制定された『東京大学予備門諸規則』⁴⁴⁾によってであった。それによると、東京大学予備門の目的が、つぎのように定められた。

「予備門ノ学科ハ東京大学法学部、理学部、文学部ニ進ムカ為メノ予備トシテ博ク普通ノ課目ヲ履修セシムルモノトス」

予備門の修業年限は、4カ年で、学年は9月11日に始まり、翌年の7月10日に終わる。さらに、学年を9月11日から翌年の2月15日までを第一期、2月16日から7月10日までを第二期とした。生徒の入学は、「毎学年ノ始メ一回トス」ることを原則とした。入学志願できる者は、「種痘或ハ天然痘ヲナセシ者ニシテ其年齢十三年以上ノ者タルヘシ」と定められた。入学志願者は、第一号書式に基づき志願し、少なくとも、つぎの課目を予修していなければならなかった。

「予修課目

国書 日本地誌要略

英語 綴文 読方

算術 分数 少数

」

入学試験に合格しても、すぐ本入学を許されるのではなく、「先仮入学ヲ許シ日間授業シ以テ其適否ヲ熟察シ然後本入学ヲ許ス」のであった。そして、四カ年間の学科課程は、つぎの通りである。

「学科課程

第一年

第一期

英吉利語 綴文 読方 文法

数学 算術

地理学

画学

和漢学 日本地誌要略

第二期

英吉利語 綴文 読方 文法

数学 算術

地理学

画学

和漢学 国史要略

第二年

第一期

英吉利語 作文 文法

数学 算術 終ル

地理学

史学 万国史

画学 自在画法

和漢学 日本外史

第二期

英吉利語 作文 文法

数学 代数 幾何

地理学 自然地理

史学 万国史

画学 自在画法

和漢学 十八史略

第三年

第一期

英吉利語 修辭 作文

数学 代数 幾何

史学 太古 中古

生理学

画学

和漢学 日本政記

第二期

英吉利語 修辭 作文

数学 代数 幾何

史学 近世

植物学

画学

和漢学 元明史略

第四年

第一期

英吉利語 英文学 作文

数学 代数終ル 幾何終ル

物理学

動物学

画学

和漢学 通鑑要略

第二期

英吉利語 英文学 作文

数学 三角法

経済学

物理学

化学 無機

画学

和漢学 通鑑要略

」

この学科課程の特徴は、つぎの通りである。

一つは、英吉利語、数学、画学、和漢学が、全学期（八期）を通して、教えられていることである。特に、英吉利語が重視されているのが窺われる。東京英語学校・東京開成学校普通科の学科課程においても、英語を重視していたのには変わらないが、詳細に見ると、その中で、英作文が重視されていることは注目される。後述するように、当時の学生によると、お雇外国人教師の中で一番地位の高かったスコットは英作文の指導に秀でていたという。

二つは、画学が全学期で教えられていることである。東京英語学校の下等語学科ではそれを教えてないけれども、上等語学科の第1～2学年では教えていた。また、東京開成学校普通科の全学年（第1～3）でも、それを教えていた。このことから、東京大学予備門の学科課程は、東京英語学校下等語学科のそれを参考にして作成されたものでないことが推察される。

三つは、東京英語学校及び東京開成学校普通科の学科課程になかった和漢学が教えられていることである。しかも、全学年にわたって教えられているのは注目される。

四つは、第一年、地理学、第二年、地理学及び史学、第三年第一期、史学及び生理学、同第二期、史学及び植物学、第四年第一期、物理学及び動物学、同第二期、経済学、物理学、化学等が教えられているのを見ると、東京英語学校の学科課程より、東京開成学校の学科課程を参考にしたものと推察される。

五つは、東京英語学校で教えられていた習字、唱歌、体操の学科を省いていることである。

東京英語学校、東京開成学校普通科の学科課程と比べてみると、以上のようなことが窺えるが、結論的に言うと、1878（明治11）年6月制定の東京大学予備門の学科課程は、東京英語学校のそれよりも、東京開成学校普通科のそれを参考に作成し、東京大学の予備教育機関的な色彩が濃厚となった⁴⁵⁾。

日高真実は、東京英語学校が東京大学予備門と改称され、制度改革された折り、東京大学予備門生となったと推察されるけれども、彼が東京大学予備門を卒業したのは、1882（明治15）年7月である。東京大学予備門の修業年限は4カ年であるので、スムーズに進級して卒業したとなると、彼は、1878（明治11）年9月、東京大学予備門に入学したことになる。しかし、入学年齢は、13歳以上ということなので、1878年9月現在においても、

彼は、満13歳に達していない。しかも、東京英語学校が東京大学予備門と改称された時には、彼は満12歳にも達していない。したがって、東京英語学校が東京大学予備門と改称された時には、彼は、東京大学予備門の級外生であったのかも知れない⁴⁶⁾。

それはさておき、日高真実は、東京大学予備門に入学した。入学後の試験（業）は厳しく、それは、毎期、時々、行われる通常試験（業）と2月、7月の2回行われる定期試験（業）との2種類であった。生徒の等級は、通常試験と定期試験との合算によって決められるのであった。授業料は、1カ月2円で、毎月4日迄に納入しなければならなかった。教科書は、自弁であった。欠席、無断欠席には厳しかった。休業日は、つぎのように定められていた。

「毎日曜日

毎水曜日ノ半日

神嘗祭 九月十七日

秋季皇霊祭 秋分日

天長節 十一月三日

新嘗祭 十一月二十三日

孝明天皇祭 一月三十日

紀元節 二月十一日

春季皇霊祭 春分日

神武天皇祭 四月三日

夏期休業 七月十一日より九月十日ニ至ル

冬期休業 十二月二十五日より翌年一月七日ニ至ル

此外二月定期試験業ノ後三日間ヲ休業トス此他臨時休日ハ其時々揭示スヘシ

『東京大学法理文学部年報』（明治11年）⁴⁷⁾では、この頃の東京大学予備門の様子を、つぎのように報告している。

「予備門ハ明治十年四月本部ノ所管トナリシ已降随テ其旧制ノ釐革モ鮮カラス即チ其教則ニ於テハーニ本部ノ学科ニ準拠シテ新ニ課程ヲ定メ学期ヲ四箇年トシ其校舍ニ於テハ事務室教場共ニ全ク本部ニ合併シ其事務ニ於テモ教務ヲ除クノ外用度、書籍、器械ノ庶務一切亦皆然リ此等部テ本学年ノ始ニ当リ施行スル所ニシテ本学年ノ終リニ於テハ予備門内外教員十八人本部ヨリ兼務ノ内外教員十五人ニシテ其生徒ノ現員四百十八人トス又本学年中予備門生徒給費節減ノ方法ヲ定ム」

1878（明治11）年6月制定の『東京大学予備門

諸規則』は、徐々に微修正されたが、それが大幅に改正されるのは、翌年の11月においてであった⁸⁸⁾。それは、「設置ノ主旨」、「学年及学期」、「学科課程及授業時間」、「入学」、「試業及証書」、「休業」、「受業科」、「書籍及機械」、「欠課及譴罰」、「寄宿」等々について、より詳細に規定した。

設置の主旨は、以前と変わらないが、9月11日から翌年の7月10日までの学年を2期に分けていたのが、3期に分けられた。これが、以前と異なる。即ち、9月11日から12月24日までを第一期、

翌年の1月8日から3月31日までを第二期、そして、4月8日から7月10日までを第三期とした。2期を3期に分けた理由は分からないけれども、入学を毎学年の始め、1回とし、また、第一年級の入学年齢を13歳とするのは、以前と変わらない。しかし、入学試験の内容は、少し変わり、これまでの仮入学制度も廃止された。

改正された学科課程表は、表（Ⅲ－④）の通りである。

表Ⅲ－④ 東京大学予備門学科課程表（1879年11月改正）

第 一 年		第 四 級	
課 目	第 一 期	第 二 期	第 三 期
英 語 学	読方・文法・綴文・訳解	同 上	同 上
数 学 学	算 術	同 上	同 上
地 理 学	政 図 地 理	同 上	同 上
画 学	自 在 画 法	同 上	同 上
和 漢 学	十 八 史 略	同 上	同 上
第 二 年		第 三 級	
課 目	第 一 期	第 二 期	第 三 期
英 語 学	読方・作文・文法・訳解	同 上	同 上
数 学 学	算 術	代数・幾何	同 上
地 理 学	自 然 地 理	同 上	同 上
史 学	万 国 史 略	同 上	同 上
画 学	自 在 画 法	同 上	同 上
和 漢 学	日 本 外 史	同 上	同 上
第 三 年		第 二 級	
課 目	第 一 期	第 二 期	第 三 期
英 語 学	修辞・訳解・作文・習講	同 上	同 上
数 学 学	代 数 ・ 幾 何	同 上	同 上
史 学	万 国 史	同 上	同 上
生 物 学	生 理	同 上	植 物
画 学	自 在 画 法	用 機 画 法	同 上
和 漢 学	日 本 政 記	同 上	同 上
第 四 年		第 一 級	
課 目	第 一 期	第 二 期	第 三 期
英 語 学	英文学・訳解・作文・習講	同 上	同 上
数 学 学	代 数 ・ 幾 何	三 角 法	同 上
物 理 学	重学・水理重学・乾電論	熱 論 ・ 光 論	磁力論・湿電論
化 学		無 機	同 上
生 物 学	動 物		
理 財 学			大 意
画 学	用 機 画 法	同 上	同 上
和 漢 学	通 鑑 要 要	同 上	同 上

以前の学科課程と異なる点は、つぎの通りである。

一つは、英吉利語が英語学と変わり、その内容において、釈解が全学期において教えられ、第3年、第4年において、習講が登場していることである。すなわち、英語学の内容が詳細になっているのが特徴である。

二つは、地理学、画学の内容が、明確化されたことである。

三つは、生理学、植物学、動物学をまとめて生物学としたことである。

四つは、経済学を理財学と改称したことである。

基本的には、以前の学科課程とかわらないが、詳細にみると、以上の点が異なる点である。

授業は、11月1日より翌年3月31日までは、午前8時30分に始まり、午後12時30分に終わり、4月8日より10月31日までは、午前8時に始まり、正午におわる。ただし、和漢字は、午後、別に課すこととなっている。

生徒の学年評価は、学期課業、学期試業、学年試業の三つの評点を通計して行うのであった。それについて細々と定めているが、その比例は、次の通りである。

「第一学期	学期課業	二
	学期試業	二
第二学期	学期課業	二
	学期試業	二
第三学期	学期課業	二
	学期試業	五

休業は、冬期休業（12月25日～1月7日）、春季休業（4月1日～同7日）、夏季休業（7月11日～9月10日）の外、次の日を休業日とした。

「秋季皇霊祭	9月23日
神嘗祭	10月17日
天長節	11月3日
新嘗祭	11月23日
孝明天皇祭	1月30日
紀元節	2月11日
春季皇霊祭	3月20日

休業日は、以前と変わらないが、授業料は、1ヵ月2円から1学期2円となり、かなり安くなった。しかし、教科書等は、「総て自弁スルモノト」した。

全学科試験を終え、合格すると、証書が与えられ、東京大学の法・理・文の志望する学科へ、本人の希望に応じて進学することが出来た。

注

(1) 市原蒼海著『如淵日高誠実先生伝』 千葉

県図書館 昭和12年6月15日 14頁。

(2) 東京毎夕新聞社編『育英之日本』 前巻
「古今教育功勞者列伝」 昭和6年10月13日
26頁。

(3) 同上書 28頁。

(4) 『文部省第二年報』 明治7年 「明治7年 外国語学校統計表」 10～11丁。

(5) 高橋昌郎著『中村敬宇』 吉川弘文館 昭和41年10月10日 118～124頁。

(6) 『文部省第四年報』 明治九年第一冊 358丁。

(7) 同上書 357～358丁。

(8) 『文部省第一～三年報』による。

(9) 『東京英語学校教則』（明治8年）（国会図書館蔵）

(10) 『文部省第三年報』 明治8年 565～566丁。

(11) 宮部金吾博士記念出版刊行会編『宮部金吾』 岩波書店 昭和28年12月10日 26～30頁。

(12) 『太政類典』 第二編 245巻之下

(13) 『太政類典』 第二編 245巻

(14) 国会図書館と国立公文書館蔵

(15) 拙著 『エム・エム・スコットの研究』 風間書房 1995年3月31日 208頁。

(16) 同上書 202頁を参照のこと。

(17) 『文部省第六年報』 明治11年 34丁。

(18) 『第一高等学校六十年史』 昭和14年3月31日 39～50頁。

第4節 東京大学・帝国大学時代の真実

日高真実は、1882（明治15）年7月、東京大学予備門を卒業し、東京大学文学部哲学科に入学することになる。満17歳の時である。

彼の入学した頃の東京大学の様子を、『東京大学第三年報』（起明治15年9月止同16年12月）を通して、見てみよう。当時、東京大学は、法学部、理学部、文学部、医学部の4学部からなっていた。

1883（明治16）年12月末調の教職員は、総理1人を、始として、162人であった。

「法理医文学部教員八部長各一人ニシテ其教員ハ教授三十二人奏任助教授七人及准奏任御用掛十七人判任助教授三十二人判任及准判任御用掛三十一人嘱託員十五人雇員十一人外国教師十三人ニシテ合計百六十二人ナリ」

この他、他官庁等より兼勤するものがいたが、日高真実が所属した文学部は、つぎのような教員構成であった。

			准講師	八人	判任五人（内文部省より三人予備門より一人法学部より一人兼勤）
「文学部長	一人	教授より兼任			
教 授	九人	内法理医学部より兼勤四人			准判三人
講 師	十二人	奏任三人 一人法学部より一人予備門より（内他より一人兼勤）	准助教授	一人	准判
		准奏 二人	史学講義嘱託一人		
		嘱託 七人	外国教師	三人	
			合 計	三十八人	」 ⁽¹⁾
助教授	三人	判任（内一人法学部より兼勤）	眞実の入学当時の『東京大学文学部教員受持学科表』（自明治十五年九月至明治十六年七月）は、表（Ⅲ－⑤） ⁽²⁾ の通りである。		

表Ⅲ—⑤ 東京大学文学部教員受持学科表 (自明治十五年九月至全十六年七月)

[illegible]

日高真実は、1882（明治15）年7月、東京大学文学部に入学した。翌月の8月末に調査された表Ⅲ-⑥『東京大学法理文学部学生一覧表』⁽³⁾によると、法学部は、33名、理学部、70名、文学部33名、合計136名である。文学部を詳細にみると、

文学部には、哲学科、政治・理財学科、和漢文学科の三つが置かれていた。入学時には、哲学と政治・理財の専攻は一緒に募集され、第二年次において、それぞれの専攻に分けられている。哲学を専攻するものは、各学年一名か、二名で少ない。

「（文 学 部）

哲學史學及英文學教授外山正一申報

本學年中余ノ教導シタル課程ハ左ノ如シ

（第一）理學部，第二年生ニ毎週三時間，哲學科第二年生ニ毎週一時間英語ヲ講授シタリ其目的及課業書講授ノ法等ノ如キハ前年ト異同アルナシ即チ學生ヲシテ英書ノ文意ヲ解スルコトニ達者ナラシメントスルヲ以テ專一トナシ理學部學生ノ課業書ニハシェキスピーヤ氏著シーガルエマーソン氏著カルチュアア及ヒビヘービアー等ノ如キモノヲ用ヒタリ哲學科學生ノ課業書ニハシェキスピーヤ氏著ハムレットエマーソン氏著シピリゼーション，アート，エロクエンス，ブックス等ノ如キモノ及マコーレー氏著フレデリッキゼグレイト等ヲ用ヒタリ此哲學科學生モ學年ノ初ハ毎週三時ヲ以テ授業ノ時間トナシタレトモ該級生ノ如キハ夥多ノ論文ヲ草セサルヲ得サル者ニシテ頗ル勉強ヲ要シ且學科ノ性質タル理學部學生ノ學科ノ如キモノトハ違ヒ到底讀書ヲ專ニスル者ナルカ故ニ授業ノ時間ヲ減少スルモ左マテ害ナキ者ト認メテ之ヲ毎週一時間ニナシタリ而シテ本年ノ終マテニ該學生ノ進歩シタル有様ニ就テ徵スルニ余ノ考ト果シテ違フコトアラサリキ理學部學生ノ進歩ノ如キモ概シテ云ヘハ余ヲシテ満足セシメタルナリ課業ノ法ハ前年ト同様ニテ學生ヲシテ交番ニ一片紙及至二片紙ヲ音讀セシメ至難ナル文章ト認ムルモノハ先ツ學生ヲシテ英語ヲ以テ説明セシメ學生ニ於テ遂ニ能ク説明スル能ハサル文章ハ余英語ヲ以テ之ヲ説明シタリ而シテ英語ノ説明ニテハ學生何分解シ兼ル文章ト認ムルモノハ不得止本邦語ヲ以テ説明シタリ其他ハ一切本邦語ヲ以テ説明スルコトハ許サ、リキ

（第二）毎週三時間哲學科二年生及和漢文學科二年生ニ心理學ヲ講授シタリ課業書及授業ノ法ノ如キハ前年ト大差異アルコトナシ即チペイン氏カーペンター氏スベンセル氏等ノ著書ヲ用ヒ授業ニハ課業書ト口授ト研究ノ三法ヲ用ヒタリ研究ノ法ニ於テハ學生ヲシテ各心理學上ノ問題ヲ撰ミ引用書ニ就テ充分穿鑿ヲ逐ケ之ヲ論文ニ綴リ教場ニ於テ他生ノ前ニテ音讀セシメタリ而シテ本學年中ニ心理學ノ大略ヲ授クルコトヲ得タリ殊ニ哲學科生ハ學力優等ニシテ進歩モ亦著カリキ

（第三）文學部第二年生ニ毎週三時間史論ヲ講授シタリ但シ歴史ヲ研究セントスル者ハ社會學ノ原理ヲ知ラスンハアルヘカラサルカ故ニ余ハ

學生ヲシテ先ツ社會學ノ原理ヲ學ハシメ社會ノ進化スル順序ヲ知ラシメタリ而シテ本學年ノ學生中ニハ政治學ヲ専門トスル者多クシテ斯ノ如キ者ノ為ニハ憲法史ヲ學フコト有益ナルカ故ニ余ハ其レヲシテ英國憲法史ヲ研究セシメタリ就中金其ノ論文ノ如キハ余ヲシテ最モ満足セシメタルモノナリ

（第四）余ハ哲學四年生ニ毎週三時間心理學ノ高尚ナル部分ヲ講授シタリ即チ一方ニ於テハ心理學ノ高尚ナル原理ヲ授ケ又一方ニ於テハ人類ノ心力ト下等動物ノ心力トノ比較，心力ノ發達，動物及ヒ人類表情上ノ言語等ヲ研究セシメタリ本年學生ノ如キハ言訥ナルモ頗ル思想ニ富ミ其進歩ノ如キハ余ヲシテ甚タ満足セシメタリ」⁽⁵⁾

1883（明治16）年12月末現在の文学部哲学科の学生は，第二学年，2名，第三学年，1名，合計3名である。外山正一は，哲学，心理学，史学，英文学を教えている。彼は，それを四つに分けて報告している。

第一は，英文学についてである。彼は，理学部第二年生に，毎週三時間，哲学科第二年生に，毎週一時間，英文学を教えている。彼は，理学部学生の三分の一しか，哲学科学生に英文学を教えない理由を，つぎのように報告している。

「此哲学科学生モ學年ノ初ハ毎週三時ヲ以テ授業ノ時間トナシタレトモ該級生ノ如キハ夥多ノ論文ヲ草セサルヲ得サル者ニシテ頗ル勉強ヲ要シ且學科ノ性質タル理學部學生ノ學科ノ如キモノトハ違ヒ到底讀書ヲ專ニスル者ナルカ故ニ授業ノ時間ヲ減少スルモ左マテ害ナキ者ト認メテ之ヲ毎週一時間ニナシタリ而シテ本年ノ終マテニ該學生ノ進歩シタル有様ニ就テ徵スルニ余ノ考ト果シテ違フコトアラサリキ」⁽⁶⁾

文学部学生の英文学の授業時間を減少した理由として，文学部学生は，「夥多ノ論文ヲ草セサルヲ得サル者ニシテ頗ル勉強ヲ要シ」たからであるとする。すなわち，文学部学生は，在学中から論文を書いていたのである。事実，後述するように，日高真実も，学生時代から論文を書いていた。

また，ここで注目すべきことは，シエクスピア，エマーソン，マコーレー著の原書を用いて英語で授業をし，学生には，英語で説明させることを原則としていることである。

第二は，心理学についてである。心理学は，文学部の哲学科及び和漢文学科二年生に，毎週三時間の教授をしたけれども，教科書として，ペイン，カーペンター，スベンサー，三氏の著書を使用し

たという。授業の方法として、「課業書ト口授ト研究ノ三法」を用いたと言う。研究の方法としては、心理学上の問題を選ばせ、研究させ、論文を書かせ、口頭発表させる方法をとった。哲学科の学生は、学力優秀で、進歩も著しいという。

第三は、史論についてである。外山は、文学部第二年生に、毎週三時間、史論を講義しているが、「歴史ヲ研究セントスル者ハ社会学ノ原理ヲ知ラスンハアルヘカラサル」という考えの下に、社会学の原理を講授したという。そして、受講生には、政治学を専門とする者が多いので、彼らの為に「憲法史」を学ぶことが、有益と考え、英国憲法史を研究させたという。

第四は、哲学科第四年生の心理学についてである。毎週三時間、心理学の高尚なる部分を講授したり、他方においては、人類の心力と、下等動物の心力との比較、心力の発達、動物及び人類表情上の言語等を研究させたという。

つぎに、フェノロサの申報を検討してみよう。フェノロサ哲学科の学生には、第一年次、論理学、第二年次、哲学、第四年次、哲学を教えている。その部分だけを検討してみよう。

「 哲學理財學教師フェノロサ申報
本學年中第一年級ノ論理学ハ第二學期ノ半ヨリ
始メ總合倫理ニ就テ自撰ノ講義ヲ授ケエヴェ
ット氏著論理学ヲ用ヒテ参考書トナセリ
第二年級ノ哲學ハ前年ニ於ケル如ク第一學期ニ
於テ授クル世態學總論ノ講義ヲ包含スルモノナ
リ然ルニ本學年ニ至リ従前ノ授業時間二時ヲ改
メテ三時トセシヲ以テ世態學二次テ教導スル所
ノ近世哲學史ノ講義ヲ従前ニ比スレハ大ニ増加
シ得タルニ由リ該講義ヲ完了シ更ニ韓圖ノ哲學
ヲ周密ニ考究セシムルニ至レリ蓋シ此課目ハ従
前第三年級ニ履修セシメシモノナリ
第三年級ノ哲學教導ノ順序方法ハ到底一変セサ
ル可ラサルモノナルヲ以テ余ハ一時ニ之ヲ改定
スルヲ最良ノ手段ト思考シ及チ棚橋ヲシテ專ヲ
ヘーゲルノ哲學(従前ハ第四年ノ課目)ヲ修メ
シメ同時ニ韓圖ノ哲學ヲ獨學セシメタリ是ニ於
テ余ノ會テ規畫シタリシ如ク棚橋ノ第四年級
ニ於テ修ムヘキモノハ全ク實踐哲學ノミトナレ
リ
第四年級ニ在テハ其第三年ニ於テ既ニ韓圖及ヒ
ヒュームノ哲學ヲ修メ了リ右變更セル方法ヲ施
ス可キニアラサレハ己ムヲ得ス二學期間第三年
級ト俱ニヘーゲルヲ修メシメタリ
第三年級ノ理財學ハ其初歩ヲ第二年級ニ完了ス

ルノ後チ始メテ專ラ之ヲ講授スルコトナレドモ
學生一般ニミル氏理財學中既ニ幾分カ曉知レ得
タル灰アルヲ以テ余ハ先ツ此等ノ復習ニ從事セ
シメタリ是レ向後余カ講義ニ関シテ甚タ切要ナ
レハナリ之ニ次テケアルンス氏理財論法ヲ講シ
再ヒ次テケアルンス氏理財原論ヲ講授セリ而シ
テ終末ニ至イリテハ各國通商論ニ就キ自選ノ講
義ヲ講授セリ参考書ニハトムソン氏著努力論ヲ
用ヘリ

第四年級理財學ハ前年ト同一ノ課目シ履修セシ
ム蓋シ該學生ハ其第三年級ニ於テ既ニ余ニ就テ
理財學ノ研究ヲ始メタルヲ以テ本年ニ至テ之ヲ
繼續セシメタルナリ」⁽⁷⁾

第一年次の論理学は、第二学期の半より始め、
総合論理について講義し、エヴェレット氏著の
『論理学』を参考書とした。

第二年次の哲学では、つぎのような内容が教え
られた。

「第二年級ノ哲学ハ前年ニ於ケル如ク第一學期ニ
於テ授クル世態學總論ノ講義ヲ包含スルモノナ
リ然ルニ本學年ニ至リ従前ノ授業時間二時ヲ改
メテ三時トセシヲ以テ世態學二次テ教導スル所
ノ近世哲學史ノ講義ヲ完了シ更ニ韓圖(カント)
ノ哲學ヲ周密ニ考究セシムルニ至レリ」⁽⁷⁾

第四年級の哲学においては、実践哲学のみになっ
たという。

フェノロサは、論理学及び哲学の外、理財学を
も教えていたが、それは、哲学科以外の学生を対
象としていたので、ここでは、それを省きたい。

外山正一、フェノロサは、その翌年も、同じ科
目を、同じ時間、同じ方法で教えていたのである
が、翌年の外山正一申報の中に、日高真実の名称
が見える。それによると、英文学の授業で、「哲
学科生日高、板倉、長沢、和漢文学科生戸田、撰
科生太田等ノ諸氏ハ学力孰レモ優等ニシテ且進歩
モ著シク小官ヲシテ甚タ満足セシメタリ」⁽⁸⁾と。

日高真実は、帝国大学令公布後最初の卒業生と
して、1886(明治19)年7月10日、卒業証書が授
与された。その卒業式は、つぎの様子であったと
いう。

「七月十日工科大学中堂ニ於テ前学年卒ノ医科大
学々生三人本学年卒業ノ法、工、文、理、科大
学々生四十六人ニ卒業証書ヲ授与スルノ典ヲ行
フ公爵三條内大臣伯爵伊藤内閣総理大臣伯爵山
田司法大臣英国公使文部次官以下文部省各局長
書記官各学校長本学総長書記官及内外教員其他
内外貴紳卒業學生親戚等ノ其儀ニ臨ムモノム無

慮三百余人ニシテ本学総長ノ演説及卒業学生総代ノ答辞伊藤内閣総理大臣英国公使ゼ、ヲノレーブル、ソル、ブランケット氏、独逸人プロフェツソル、ドクトル、ロエスレル氏ノ演説アリ此夜同所ニ於テ本学総長其夫人来賓及其夫人ヲ延接ス来会スル者スル者二百八十余人ナリ其卒業証書ヲ授与セラレタルモノハ法科大学ニ於テハ……、医科大学ニ於テハ……工科大学ニ於テハ……文科大学ニ於テハ哲学科学生日高真実長沢市蔵和文学戸田恒太郎理科大学ニ於テハ」⁽⁹⁾

帝国大学になって最初の卒業式の様子の報告であるが、注目すべきことは、つぎの点である。

一つは、卒業生の数が、医、法、工、文、理を合わせて、46人と、少ないことである。「文科大学ハ哲学ヲ以テ主要ノ学科トス」⁽¹⁰⁾といわれた哲学科においてさえ2名の卒業生しかいない。

二つは、それに対し、来賓が多いことである。しかも、伊藤博文総理大臣を始め、国の中枢を担う人物が出席していることである。

三つは、伊藤博文内閣総理大臣の演説で、「我カ国将来ノ進歩ヲ図ルノ事業ニ於テ卒業諸君ハ最主要ノ地歩ヲ占ム諸君ノ負フ所重且大ナリ」⁽¹¹⁾と述べているように、将来の国家を担う人材として期待されたのであった。

帝国大学を卒業した日高真実は、「七月十三日……文科大学卒業生日高真実長沢市蔵戸田恒太郎……給費入学ヲ許シタリ」⁽¹²⁾とあるように、大学院に進学した。そして、真実は、文科哲学中

教育哲学を攻究したのである。その後、彼は、翌年の明治20年9月16日、「文科大学ニ於テ英語学授業ヲ嘱託セラレ」⁽¹³⁾とあるように、帝国大学で英語学教導の嘱託を命ぜられている。留学する年の明治21年7月5日、「文科大学語学授業嘱託文学士日高真実ノ嘱託ヲ解」⁽¹⁴⁾かれることとなった。それは、2日前の7月3日、「文学士日高真実教育学修行トシテ独逸国へ留学ヲ命セラル」⁽¹⁵⁾こととなったからである。

注

(1) 東京大学史史料研究会編『東京大学年報』第2巻 東京大学出版会 1993年6月10日 229頁。

(2) 同上書 224頁。

(3) 同上書 142頁。

(4) 同上書 141頁。

(5) 同上書 285～286頁。

(6) 同上書 285頁。

(7) 同上書 286頁。

(8) 同上書 403頁。

(9) 前掲書『東京大学年報』第3巻 1993年8月10日 27～28頁。

(10) 同上書 42頁。

(11) 同上書 31頁。

(12) 同上書 43頁。

(13) 筑波大学蔵「日高真実履歴書」。

(14) 前掲書『東京大学年報』第6巻 1994年3月25日 44頁。

(15) 同上書 43頁。